



山口 明日香氏

オーブン カレッジ

近年、日本ではクマやサル

など野生動物による農作物被害や人間への危害が増加している。動物と人間の関係は、

人間による環境開発が原因で変化し、これまでに絶滅に追いやられた野生動物も少なくない。日本でこれまでに絶滅した野生動物は、ニホンカワ

やまぐち あすか 日本経済史。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了、博士（経済学）。1979年生まれ。

ウソ、ニホンオオカミ、トキなど二十種以上におよんでいないトラやヒヨウは激減しているが、世界的にみれば、日本は先進工業国のなかで近代以前に野生動物の絶滅を経験しなかつた稀な国である。

中国では一六世紀後半から一七世紀にかけて東南山地の

開発と環境

山林開発がおこなわれ、ツキノワグマやオオカミは次第にみられなくなった。トラは、

ではミャンマー国境付近の保護区に生息するのみである。

行動域が広いためにかろうじて生き延びたが、一八世紀に出稼ぎ労働者による大規模な山林開発がすすむと、絶滅に

むかった。東北部においても、五代將軍綱吉による「生類憐

深刻化する生態系への影響

みの令」の発布（一六八七年）は、開発の結果、動物と人間の関係に変化があらわれたことを示す出来事であった。しかし一八世紀にはいると、山が急峻な日本では農地の拡大は停滞した。さらに、急峻な地形では森林伐採も困難であったために中国のような大規模な森林消失は生じず、動物の生息域はまもられた。

一九〇五年に絶滅したとき

れるニホンオオカミも、人間社会との接近により狂犬病にかかって殺されることがあった（犬との雑種化説もある）が、徳川時代を生き延びた。しかし、明治以降、人間社会に銃が普及すると、動物は銃

を手にした人間から逃げ切るのがむずかしくなった。急峻な地形は、動物の逃げ道をさえぎり、野生動物を絶滅させうる要因になった。トリも産卵・子育て期の移動は困難で、人間から逃れるのは容易ではなかつた。「狩猟法」の制定（一八九五年）や同法改正（一九一八年）は、野生動物のおかれていた悲惨な状況を推測させる。

近代以前の日本において野生動物の絶滅が回避された理由は、地形が動物保護の役割をはたしていたからにすぎなかつた。日本人の自然や動物への優しさが理由ではない。それは、現在の日本でも同様

である。戦後つくられた人工林は、森林面積の四割を占めるようになったが、手入れされないまま放置され、生物多様性の乏しい「緑の砂漠」と化している。

こうした人工林の林床では、天然林にくらべて日当たりが悪いために動物の餌となる植物は生育しにくく、そもそも広葉樹林に生息する動物は、針葉樹で形成される人工林では生きていけない。森林の多い現在の日本でも、野生動物のおかれた状況はかわっていないのである。自然環境や生態系に影響をあたえない開発行為などないことを、私たち人間は忘れてはならない。